

JAQG 協賛メンバー訪問 ー大起産業株式会社様ー

1. はじめに

航空宇宙品質センター（JAQG）は 2001 年の創設から 25 周年を迎えます。この記念企画の一環として、協賛メンバー様への訪問を実施しております。JAQG では年に一度、活動報告会を開催し、多くのメンバー企業様にご参加いただいておりますが、「現場の生の声を十分に拾い上げられていないのではないか」という問題意識がありました。本企画は、9100 規格の改定動向や実務上の課題について率直な意見交換を行い、現場の声を直接伺うとともに、IAQG および JAQG に対して親近感を持っていただくことを目的としています。

この企画の第 10 弾として、2026 年 9 月 18 日、ボーイング旅客機の組立からスタートし、長年にわたり航空機構造組立・治工具製作を支えてきた大起産業株式会社様（従業員数約 245 名：2025 年 8 月末、航空宇宙分野が売上の 6 割）への訪問を実施いたしました。

2. 大起産業株式会社様のご紹介

同社は 1980 年代初頭、B767 フレーム組立から航空宇宙分野へ参入されました。株式会社 IHI 様との取引を開始したのを皮切りに、三菱重工業株式会社（MHI）様、株式会社 SUBARU 様へと順次取引を拡大されています。

現在は大型機胴体や各種ドアなど、難度の高い航空機構造部品の組立・加工を主力とされており、売上全体に占める航空宇宙分野の割合は約 6 割に達しています。さらに、航空宇宙以外の産業分野への参入や、ロケット等の宇宙分野製品にも果敢に挑戦されており、幅広い製品群と高い技術展開力を備えておられます。

同社の大きな強みの一つが、高い「人財調達能力」と柔軟で現代的な取り組みです。深刻な人手不足が業界全体の課題となる中、同社においても採用におけるご苦労はあるものの、「航空宇宙分野の製品を手がけている」という誇りと高い地域知名度に加え、WEB メディアや各種媒体を柔軟に活用した時代に沿った採用活動を展開されています。また、品質保証体制としても品証部門+9 名（計 12 名体制）を整え、万全の品質管理のもとで製造にあたられています。今後必要とされる品質規格についても極めて熱心に議論されており、品質・人財の両面で前向きな姿勢が際立っています。

当日は同社の品質管理・製造実務の皆様にご対応いただきました。JAQG 側からは、川崎重工業株式会社の上原様、星野様および事務局（SJAC 城福）が訪問いたしました。



左から 城福（SJAC）、上原様、星野様（川崎重工業）、松尾様、寺澤（奥）様、天田様（手前）、柴田様、高井様、木村様（大起産業）

3. JAQG 説明および規格の動向

JAQG/IAQG の活動概要、および現在進行中の 9100 規格改正（JIS Q 9100 から民間規格「IA9100」への移行）の最新動向について説明を行いました。併せて、中小規模・低複雑度の製品を対象とした新規格「9150 規格（Foundational QMS）」の概要や、QMS の成熟度評価ツールである AIMM（Aerospace Improvement Maturity Model）、OASIS Insight などの各種支援ツールについても紹介いたしました。

4. 意見交換

4.1 情報セキュリティについて

- 情報セキュリティ管理の基準:

改定案に含まれる情報セキュリティ要求について、「一定の制限やアクセス管理は行っているものの、どこまで対応すれば十分と言えるのか」という懸念につき議論しました。

- ソフトウェア（NC データ等）と品証の範囲:

ソフトウェア関連規格（9115/9125）自体は該当外（ソフトウェア製品ではない）としつつも、加工で用いる NC データ等の扱いについて、どの範囲までを品質保証（品証）の管理対象に含めるべきか、後工程での決定や顧客（カスタマー）からの具体的要求に左右されるという実務上の難しさがあることが提起されました。

4.2 APQP / PPAP 導入について

9100 改正案で新たに注記として推奨される APQP（先行製品品質計画）や PPAP（生産部品承認プロセス）について、既存の製造プロセスの流用時に「どの範囲をどう適用すべきか」の判断など、実際の加工・組立現場に合致した運用へ落とし込むことの難しさについて懸念が示されました。

4.3 AIMM、OASIS Insight 等の活用

AIMM（Aerospace Improvement Maturity Model）は、まだまだ普及途上ですが、大起産業様では AIMM を試した経験がありとのことで、使い方が難しいという率直なご意見を頂きました。

4.4 新規格「9150 規格」について

開発中の「9150 規格（Foundational QMS）」について、「9100 が組織全体をカバーする QMS 要求であるのに対し、9150 は製品品質および納期管理に特化した QMS 要求」という理解が示されました。

サプライチェーンの中には JIS Q 9100 や JIS Q 9001 の取得も難しい小規模事業者がいるのが現実であり、そのような中で 9150 という規格が実際にどのような場面・場所で指定・活用されるだろうかという関心が示されました。



意見交換の様子

5. 大起産業株式会社様の声

この度はお忙しい中、御足労いただきましてありがとうございました。9100 規格の改正動向や新たな品質マネジメント規格について、理解を深める貴重な機会となりました。特に、情報セキュリティへの対応や APQP・PPAP の導入など、実際の製造現場でどのように運用していくべきか、具体的な課題を改めて認識しました。規格の要求事項を理解するだけでなく、自社の業務や製造プロセスに即した形で、無理なく実践できる仕組みづくりが重要だと感じています。

また、AIMM や OASIS Insight などのツールについても、品質マネジメントの改善に役立つ可能性を感じる一方で、実際の活用方法や効果的な使い方については、さらに理解を深める必要があると考えています。

今後も、規格改正の動向や新たな取り組みに関する情報提供に加え、実務に直結する具体的な事例や活用方法を共有いただけることを期待しています。
今回の貴重な機会を通じて、率直かつ活発な意見交換をさせていただいたことに、改めて感謝申し上げます。

6. 最後に

大起産業様では多くの方にご対応頂き、活発な意見交換を行うことができました。平時から IAQG の各種ツールへのご関心も高く、今後の JAQG 活動をより良いものへと高めていく上で極めて貴重な糧となりました。

頂いたご意見については、今後 JAQG 活動報告会などで対応できないか、検討課題にしたいと思います。

なお、IAQG としては、一昨年度に実装された OASIS Insight（同規模同種の企業における自社の位置や改善点を示すレポートの出力機能）と SCMh、AIMM を連携させ、レポートから SCMh や AIMM のどこの章を参照すると組織の品質マネジメントの改善につながるかを示すことを目指しています。

お忙しい中、ご対応をいただいた大起産業株式会社の皆様に、心より感謝申し上げます。

以上